

紙人の表

中・四国No.1法律事務所確立した正義感、反骨精神を持つ異能の人

NPO法人広島経済活性化推進倶楽部理事長
山下江法律事務所所長 **山下 江氏**



山下 江(やました・こう)氏のプロフィール
昭和27年4月広島県江田島市生まれ。46年3月修道高校卒業。同年4月東京大学教養学部・同大学工学部。平成2年11月司法試験合格。5年3月最高裁判所司法研修所卒業。4月弁護士登録(東京弁護士会所属)。7年7月広島弁護士会に登録替、山下江法律事務所設立。18年度広島弁護士会副会長、18年6月~KKC理事長、18年10月~YMFG監査役、23年4月弁理士登録。広島商工会議所、広島県、広島市等の中小企業再生支援等の専門スタッフ。趣味・ゴルフ、釣り、マリンスポーツ、音楽鑑賞など。座右の銘「すべてを疑え」。

昨今の弁護士は拝金主義や犯罪弁護士の地位も低くなっている中で、弁護士臭さを感じさせない、かつ情報公開に前向きで注目されているのが山下江氏であろう。借名弁護士ではなく、第一線で活躍する弁護士十六人を抱える山下江法律事務所は中国・四国地方でナンバーワンの偉容を誇る。

一方、NPO法人「広島経済活性化推進倶楽部」(KKC)理事長として活躍する。KKCは平成十三年六月、起業家、投資家、専門家(支援家)の交流を始めとした諸事業の展

開によって、広島経済の活性化を図る目的で設立された。

山下理事長は十八年に就任した二代目であるが、理事長就任を契機に「やるからにはもっと実が稔るよう」に、実際に役立つ組織に」と、「起業家・投資家・専門家お見合い交流会」と銘打った交流会は十五回を数えている。

去る六月の創立十周年記念交流会には、話題の「もしドラ」の著者、岩崎夏海氏を講師に呼んで特別記念講演を開催。また「広島ジュニアマリリンバアンサンブル」によるマリリンバ打楽器の演奏と、当日十五回交流

会には二百人超が参加する盛大さ。

第十六回は十月十五日に開催されるが、これまで主催したイベントは三十六回、講師五十三名、紹介したベンチャー企業は七十四社を数える。またKKCのイベントを契機とした出資総額は一億円を優に超えるなど、広島県の活性化・活力に貢献している。

山下江氏は江田島市の大柿出身。修道中・高校時代は、成績が六年間を通して学年で一番という記録保持者である。また東京大学へも修道からトップで入学するという天才頭脳の持ち主として知られた人物である。

山下氏の座右の銘は「すべてを疑え」。アカルトの言葉であるが、山下氏は「これは人に対して疑心暗鬼になれというのではなく、物事というのなぜそうなるのか? これではないんだらうか? もっといい方法はないのだからか?、いろいろ考えよということ。当たり前と思っ

てみることも、色々仕組みとかを考えると、おかしなことがある。あつて、それは変えていかなければいけない。あるいは改革していく。技術の発展だって同じことで、どうか?と考えることで技術革新が起こってきます。だから僕は人類発展の法則だと思っ

ている。絶対というものは今のところありません。アカルトは絶対というの「我思う故に我あり」と。自分が思うから自分がある。これだけははっきりしています。だから後はすべて分らないから疑ってみるということです」

こうしたことが山下氏の着る物にも当てはまる。それはノーネクタイ論者であること。写真のようにポロシャツ姿。ここはノーネクタイの瀧著に耳を傾けると、

「世の中の風潮に対して何の疑問を持たず、おかしなにおかしく思わない。私がネクタイをとった最大の理由は、やっぱり夏の暑い時期に、サラリーマンがネクタイして背広を着て汗を流しながら走り回って営業活動をしている。ネクタイしてないと失礼になるんじゃないかと。外したいのに苦しんでいる。そういう姿を見て、これはそういう現状を変えないと、やっぱり可哀そうすぎる。それにはトップがネクタイ外さないに従業員はそうはいかないじゃないですか。ですから僕は機運を促すために百人の会合でもみなネクタイしていても、僕はノーネクタイです。そりゃ恥ずかしいですよ。でもノーネクタイで頑張っている。今はクールビズが始まって少しは楽なんですけど、冬になってもネクタイ、ノーサンキューで通っています。」

大体ネクタイというのはイギリスやアイルランドで、狩りをする時に寒いので、ちよっとおしゃべりするといふことが起源のようでした。八月十五日にロンドンに行った時に見た光景、コート着てストロブ出しているところもあります。そのイギリスと同じように高温多湿の日本で、何も考えずビジネススタイルとして首絞めて、暑いのに。勿論ネクタイしなないと落ち着かないという人やしい人はすればいい、各自自由ですから。ただネクタイをしめる強制はしてくれなると。やっぱり楽な姿で自由な発想でいきたいし、ちよっと大袈裟ですが、自分が犠牲になって、私はどう非難されようといふので、ノーネクタイが広がって欲しいといふ一念で始めてもう十年以上になり

ます」

「結婚式や葬式などは友人に恥かかせるわけにはいきませんから、そういう時やYMFの監査役やっています。その取締役会なんかはちゃんとネクタイしめますけどそれ以外、ビジネスのあらゆる場面はノーネクタイ、ラフなスタイルで行きます。小ざっぱりして行けば何の問題もないわけですよ。トップがそうしないと部下はできない。洋服で人を判断するべきじゃない。問題は中味だろうと。ですからどんな方と会うにしてもノーネクタイで通っています」

世の中の改革への挑戦者ですね、と言うと。クッククックと子供のよう

に笑って見せる。人生に遠慮しているように感じるのも氏の歩んできた道からかも知れない。

東大へ一発入学したことで親のたがなくなると気が付くと、学生運動の中心の立場に立っていた。

三十代の半ばころ、約十年間の活動を振り返って「命がけで運動を続けるべきかどうか」と考える中で運動を止めたのだ。さてどうするか?と悶々する日々の中で夫人から「弁護士になったら?」と。学生運動とは違った形で世のため、人のために役立つことができる、と、弁護士を目指して猛勉強。予備校で法律の勉強をし、「刑事訴訟法」では、半年後の模擬試験で全国で第一位に輝い

た。その時の記念に予備校から贈られたのが表紙写真の置時計である。

とはいえ、当時の司法試験の合格者は五百人、合格率は一・数%という超難関であったようだが、本人曰く「半年勉強して日本一ですから、一年で合格と思っ

ていたんです。さすがにそう甘くなかった」と。

平成二年に三年目で司法試験に合格し、四年に弁護士登録し東京弁護士会に所属も二年で帰広を決意。「広島に行っても仕事があるかどうか分からない。事務所も秘書もいる」といふことで「壮絶な決意を固めて」帰広したという。最初の三ヶ月間は国選弁護に集中。四ヶ月が過ぎると修道時代の仲間などが仕事を

持って来たり紹介してくれたりし、国選には手が回らない。「人手もいるのですが、一年間は我慢しよう」としたがってこの一年間は死ぬほど苦しかった「時期であった。そして一年我慢して、仕事が増えたので人を取

るのではなく、仕事より先に人を人れようという発想で活動しているうちに、ここまでの規模になったのであった。

山下氏は言う「世のため、人のため、困った人と共に悩み苦しみ解決していく」と。法律事務所、KKCと二足のわらじで活躍する山下江氏が「KKCはボランティア、広島に活力を与える動きをするのも、世のため、人のため」と言った。